「中世イタリア都市における共通善」　　研究発表会（合評会）

2014/03/11　博士研究員　中谷　惣

● 共通善とは何か

共通善 bene commune
＝個人や個別集団にとっての善ではなく、政治社会全体にとっての善。公共的な善（価値）

近代以降の政治思想
　自由主義：ロック、アダム・スミス　　個人の「自由」を出発点（絶対君主との対比）
　共和主義、共同体主義：スキナー、ポーコック、サンデル
　　「自由」のオルタナティブ　⇒　共通善を中心として政治や社会を考える

共通善思想の起源
　古代ギリシア（アリストテレス）、古代ローマ（キケロ）を経て、中世ヨーロッパ、特にイタリア中世の自治都市へ（トマス・アクィナス、ラティーニ）。
　共通善は、中世都市の政治や社会の中心的価値へ。

ヨーロッパ都市の基礎的な価値理念の把握　⇒比較の視座

● 共通善のイメージ――ロレンツェッティ作『善政と悪政』（1330 年代）

市庁舎の政府の会議が開かれる間に描かれる。

● 共通善思想と現実政治

現実政治の場でも共通善の理念が掲げられる。政策の動機づけ、正当化の原理として。
（臨時課税、戦費、民事的な事柄など・・・）

共通善のレトリックの利用の背景
１．一般市民の政治参加が狭まる時期（寡頭制、単独支配）
　⇒支配・被支配関係を覆い隠すための共通善。支配者の「支配」を正当化する原理。
２．法からの逸脱した自由な政治行為が多くなる時期。それを正当化する必要。
３．都市共同体の存続を掲げる必要がある時期
　戦争や飢饉など現実の危機の時代。都市共同体を一体化する必要。

⇒新たな状態や行動を正当化するために共通善のレトリック。
ただし共通善から大きく離れた行動はとることはできない。共通善の束縛を受ける。

● 共通善の内容———個人の権利　VS. 共通善

債権者は負債者を拘束できるという法慣習（私権の保証）。
戦争や飢饉により負債者が続出。都市外へ逃亡⇒労働力の不足という事態が発生。
自治政府は、拘束の法慣習を一時停止。
⇒ただしその理由として、その停止が都市共同体の利益とともに、債権者にとっても良い効果をもたらすことを指摘。

● まとめと課題

アリストテレスから引き出す共通善の多様性
現代の共和主義者が呼び起こす共通善——国家のない小さな共同体内での統一的な利害
中世では、都市国家の政治の方向付けにおいて示される。

課題：税制の問題（富の再分配）から、共通善思想の浸透した政策を検討する。
　　個人の権利と共通善との兼ね合い